2016 年度 琉球大学 前期 英語

第 1 問

海が国を飲み込んだら何が起こるか

世界中から人が訪れるモルジブは、インドの南端から 595 キロメートル離れた場所に位置する約 1,200 の島々からなる国家である。遠く離れた場所であるにもかかわらず、このリゾート地は夢のバカンスを楽しみに来る人々でいっぱいである。

残念なことに、モルジブ国民と他の 5〜9 の島国の住民にとって、このすべてが消えるかもしれない。気候の変動が彼らの国をまるごと奪い去るかもしれないのだ。海抜の低い島々を持つモルジブは、気候変動の影響により、南アジアで最も危機に瀕している国と呼ばれている。

気候変動は世界中の海に近い家屋や都市を脅かしているが、その中には、単に数マイル移動すればすむ問題ではなく、むしろ、マイアミ、アムステルダム、上海のように、都市そのものが消滅するかどうかの問題となっている地域もある。およそ 6〜10 の島国の住民にとっては、まもなく国が丸ごと水没するかもしれないのだ。

これから先どのようなことが起こるかを正確に知ることは不可能だが、多くの科学者が恐れるのは、我々が今どんな行動に出ようとも、いくつかの国は水没するということだ。我々はもうすでに大量の気候変動の原因となるガスを大気中に放出してしまっており、今後数年で海抜はあと 30〜60 センチメートル上昇するとされている。したがって、いかなる技術力をもってしても海抜の低い島国すべての消滅を防ぐことはできないのだ。このことは、我々が気候変動を防ぐ行動を起こすまでの待ち時間があまりにも長すぎたということに気づかせてくれている。我々はすでに度を超えてしまっているということである。

もしどうにかして、人間の手による気温の上昇を、多くの島国が求めているように産業革命以前の水準から 1.5℃の上昇までにとどめることができたならば、島国のほとんどは水没せずにいることができる。しかし現状において、2℃あるいは 3℃の気温上昇は確実であろう。太平洋の島国は世界に率先して人々に警告してきた。この小さな島々が、温室効果ガスをほとんど排出しないにもかかわらず、気候変動に苦しむことになるのだと。

現時点で、このような結果はほとんど不可避に思える。そして同時に、こうした国々が消滅を始めるとどうなるかという疑問が湧いてくる。これまでは、ある国が他国に乗っ取られたり、新たな国として分裂したりということはあったが、ある国が完全に消滅したことはいまだかつてない。したがって、ある一つの集団をなす人々が物理的な故郷を失った際に用いる法律的、文化的、そして経済的な手本になるものは存在しない。「国家の枠を超えて、市民権の新たな概念が形成されねばならないでしょう」そう語るのは、Sabin Center for Climate Change law at Columbia Law School のセンター長 Michael Gerrard 氏である。「私は自信を持って、今世紀中はこれらの島国は国のままであり続けると言えます。しかし、次の世紀となると話は別で、多くの不確定要素があります。」

そうした不確定要素が多くの疑問を生み出すと Gerrard 氏は言う。水没してもその国は国連に席があるのか。水没しても、その国がもともとあった場所の周囲の海はかわらずその国のものであり、漁業権や鉱業権は残されるのか。水没した国のインターネット上のアドレスに使う国番号は残るのか。その国の国民はどこへ行くのか。彼らの市民権はどうなるのか。そして、彼らには温室効果ガスの排出者や排出国に損害を賠償させる何か法的権利はあるのか。

Gerrard 氏は言う。実際にそうした島国の水没が始まるまでに、何百万人もの人々が自国内の海抜の低い地域や都市からの移動を余儀なくされ、世界は危機に陥るだろうと。その結果、我々のように島国でない国が自国の問題で手いっぱいになってしまい、小さな島国の問題は彼らにとってあまり重要なことではなくなってしまうでしょう。

85 年後のことを考えることを Gerrard 氏は嫌うが、家を失った人々の置かれる状況は、今でも明確さからは程遠い。島国はこうした問題について考えているが、ほとんどの国は考えていない。昨年、モルジブ前大統領の Mohamed Nasheed 氏はこう語っている。「あなたがたは、温室効果ガスを大きく減らし、海抜がそれほど上がらないようにすることもできる。あるいは我々がボートに乗ってあなたがたの国の海岸に現れた時に、我々を迎え入れることもできる。あるいは、我々がボートに乗ってあなたがたの国の海岸に現れた時に、我々を撃ち殺すことだってできる。あなたがたが選ぶのです。」

今のところ環境難民をどうするかについて国際的な合意はない。環境難民とは、地球温暖化によって生じた問題のために故郷から出ざるを得なくなった人々を表す法律用語である。そして、今のところ気候変動の影響に基づいてビザを発行された者はいない。実際のところ、ここ 20 年の間にニュージーランドとオーストラリアは 20 件近くの環境難民の事件において、環境難民に滞在させることを拒否している。1951 年の難民会議の下では、今日でもこうした人々に向けた種類のビザは存在していない。しかし、最終的には各国が現実と向き合い、国境を開くか、それとも環境難民を救う何か別の、たとえば彼らが移転するための土地を売るなどの方法を模索するかのいずれかを開始せねばならなくなるだろう。

キリバスは 340 万平方キロメートル以上に渡って太平洋に広がる群島からなる島国だが、国家としての立場を守り続けることを決めた。「我々キリバスの人間にとって、科学はきわめて明快です。」そう語るのはキリバス共和国大統領官邸の報道官 Rimon 氏だ。「我々はわかっているのです。たとえ他国が二酸化炭素排出量の削減を決定したとしても、30 年から 50 年後には我々の島々は消滅することになるのですよ。」

それゆえ、キリバスの Anote Tong 大統領は昨年、1,930 キロメートルほど離れた場所に位置するフィジーの島々の中の一つに小さな土地を購入した。今のところは、農作物の栽培や新鮮な水の供給に使う予定である。これらはすでにキリバスでは海水の上昇によって塩害を被っている資源である。「我々はキリバス国民としての固有性も、文化も、そして慣習も、気候変動の影響によって失いつつあるのです。」 Rimon 氏は言う。「しかし、我々は準備をしておきたい。そうすれば今から 50 年後に、まだキリバスと呼ばれる国は存在しているだろう。」

もし他の国々が何百万人もの人々に自国へと移住してきてほしくないなら、あるいはその最中に命を落としてほしくないなら、先進工業国は温室効果ガスを削減するためにもっと多くのことをすべきだ。そうしないのなら、それは単に環境への被害にとどまらない。人間自身も被害者となるだろう。

問 1　多くの科学者が、我々が今どんな行動に出ようとも、いくつかの国は消滅する恐れがあると考えているのはなぜか。

問 2　ほとんどの島国が水没しないでいるために我々がしなければならないことは何か。

問 3　他の国々は、将来的な問題、すなわち消えかけている小さな島々で新たな故郷を求める人々への対処にあたって、3 つの方法があるとモルジブの前大統領は述べた。彼の言う他国にできる 3 つのことを挙げよ。

問 4　climate-displaced people という言葉の意味するものは何か。

問 5　キリバス国民が将来的にやらねばならないことになる可能性が高いのはどんなことか。

第 2 問

男女別教室 公立校で男女別に

過去 100 年以上にわたり、公立学校での男女別学はアメリカにおいてそれほどありふれたものではなかった。ところが、学校で男女を分けるべきという主張が次第に注目を集めてきている。その上、ゆっくりとだが世界中で広まりつつあるのだ。実際に男女別学はアメリカやヨーロッパの公立学校で増加傾向にあり、これは教育関係者らが、特に貧困層の生徒の学業成績の向上のための方法を模索しているためである。男女別学に賛同する人々は、男女別にした場合に一部の生徒の成績が伸びるという研究を引き合いに出す。しかし、反対派の人々は、男女共学のほうが実社会への備えになると言う。全体的に見れば、自分の子供をどちらの学校に通わせるかについての一人一人の選択が、今日において家庭、教育関係者、そして政府の間で大きな話題となっている。

昨年イタリアのローマで第 6 回国際男女別学会議が開かれ、男女別教室の利点について議論が交わされた。International Association for Single-Sex Public Education によって組織されるこの年に一度の会議は、男女別教育に関心のある世界中の教育関係者に向けたものである。支援者らはこの教育形式をすべての学校に押し付けることを望むのではなく、そのかわりとして、子供に男女別学教育をさせたい親に従来の男女共学制度を強制しないよう求めている。男女別学教育の首席報道官である Leonard Sax 博士は、ニュージーランドなどの国の成功を手本とし、他国の親が子供に与えうる選択肢を持てるようになることを望んでいる。

ニュージーランドはモデル国家として広く男女別学と男女共学を国民に提供している。1996 年に自らの医師の道を諦めて男女別学を推進する活動に身を捧げた Sax 博士は言う。「ニュージーランドが、もしもその 400 万人の国民すべてに対してうまく男女別学教育を提供

することができたなら、間違いなく、より大きなアメリカなどの国々であっても一切の問題は起こらないでしょう。」今日、彼は世界各国に呼ばれ、男女別学教育の利点について語っている。

男女別学に反対する立場の主張の一つは、実社会に対する準備ができないということである。男女別学教育が基にしているのは、男女の差異は生徒の学習の仕方や教室での振る舞い方に影響を及ぼしうるという理論である。多くの教育関係者が、男性と女性では多くの点で学習の仕方が異なるということを理解することの大切さを認識しているが、この理論は概して社会科学者には受け入れられない。

しかしながら、フロリダの Charles Drew 小学校の Angeline H. Flowers 校長によれば、同校において 2 年前に男女別授業の提供を始めてから、生徒の成績が平均 50%から 60%まで上昇したという。同様の向上が他の複数の学校からも報告されている。このことがきっかけで、男女別授業はシカゴ、ニューヨーク、フィラデルフィアといった他の公立学区にまで広がった。National Association for Single-Sex Public Education によれば、2002 年には教室が男女別になっている公立の学校はアメリカ全土でわずか 11 校しかなかったという。今日、2013～14 年度においては、全国におよそ 750 の公立学校が少なくとも 1 つの男女別授業を実施しており、完全に男女別学の公立学校は 850 校がアメリカの家庭にとって選択可能となっている。

男女の脳の発達には大きな差異があるという証拠は乏しいとして批判する声もある。テキサス大学の心理学者 Rebecca Bigler 氏によれば、性別でも何でも、何らかの社会的分類に当てはめて分け隔てることは、他人に対して良くないイメージを増幅させることになるという。一方で支持者らは、しばしば男子生徒の学習上の困難を指摘する。男子生徒は女子生徒よりもたいてい全国読解力テストの得点が低く、学校を中途退学する確率もはるかに高い。教育関係者らはまた、女子生徒は男子生徒と比較した場合に理科の成績が劣り、女子生徒同士で一緒にいるほうが良いと述べている。さらに、学校関係者によれば、子供は教室に異性がいると簡単に影響されてしまうという。支持者はまた、女子生徒は他の女子生徒と、男子生徒は他の男子生徒と一緒にいるのが普通だとも述べている。

現在の調査で分かっているのは、男女別教育は特に目立った学力的差異を示してはいないということである。世界中の 160 万人の子供についてまとめた 184 の研究を分析した心理学者の Janet Hyde 氏によれば、これまでの研究では、男女別のほうが良いということを示すものはなかったという。

もしも支持者らが、将来的に、男女共学授業では不可能な何らかの形で男女別授業によって生徒の学力や教室内での態度が向上したという証拠を出すことができたなら、男女別学への動きはますます大きくなるかもしれない。親がどちらの側に立とうが、アメリカ国内でこの動きに関する興味は増大しつつあり、議論を生み出し続けることは明らかである。

問 2

(1) Leonard Sax 博士によれば、ニュージーランドは学校内に男女共学の教室を含めて成功を収めている唯一の国だという。

(2) 社会科学者は男子生徒と女子生徒の間の学習に違いがあるということに常に賛同するわけではない。

(3) アメリカではさらに大きな男女別教育への動きが起きるだろう。

(4) 男女別教育をめぐる議論は、アメリカでは 20 世紀初めからかなりの注目を浴びてきている。

(5) フロリダで良い結果が見られた後で、男女別授業はシカゴ、ニューヨーク、そしてフィラデルフィアといった他の公立学区にまで広がった。

(6) Rebecca Bigler は男女別授業を強く支持している。

問 3

(1) 男女別教育理論によれば、

a. 男子生徒と女子生徒は同じだ。

b. 女子生徒は男子生徒より賢い。

c. 男子生徒は女子生徒より賢い。

<u>d. 男子生徒と女子生徒は別々に学習する。</u>

(2) 男女別学の支持者が望むのは

a. 男女両方を含む新しい授業を押し付けること。

<u>b. 男女別学と男女共学の両方が親の選択肢になること。</u>

c. すべての学校に男女別教室の提供を強制すること。

d. 共学授業のみを学校に求めること。

(3) ニュージーランドは良い手本である、というのも、

a. 単一の性別の 400 万人の国民しかいないから。

<u>b. 男女別の授業も共学の授業も両方の種類を提供するから。</u>

c. アメリカに比べて一切何も問題がないから。

d. Leonard Sax 博士の故郷だから。

問 4 この記事に基づいて、男女別授業に関わりのある集団を 3 つ挙げなさい。

第 3 問

マイケル: やあナルヒコ。冬休みはどうだった？

ナルヒコ: すごくよかったよ。カナダに行ったんだ。だけど、5 日間しかなかったからそこの文化とか、食べ物とか、移動を楽しむには足りなかったよ。

マイケル: それは残念だったね。そこでどんなことをしたの？

ナルヒコ: ええとね、西海岸のバンクーバーに行ったんだ。景色が綺麗で、食べ物もすごく良かった。有名なスタンレーパークとかグロースマウンテンに行ったんだ。それに、お

いしいスモークサーモンをそこのレストランで食べたよ。海産物の新鮮さといったらもう(1)信じられなかったよ。

マイケル： それはすごいね。バンクーバーアイランドには(2)行けたの？

ナルヒコ： うん、ちゃんと行ったよ。バンクーバーからフェリーに乗って、バンクーバーアイランドにあるビクトリアシティに行ったんだ。ビクトリアは観光客御用達の場所なんだけど、びっくりするくらい落ち着くところだった。

マイケル： (A)もし機会があればまたカナダに滞在するかい？（など）

ナルヒコ： 絶対にする。初めて知ったんだけど、カナダはとても(3)多民族国家で、世界中の人が来るんだ。何人かすごく良い人たちにも会った。今は友達も増えて、フェイスブックでやりとりしているんだ。

マイケル： (B)いつまたカナダに戻ろうと思っているんだい？（など）

ナルヒコ： まだ決めてないけど、カナダの夏を体験してみたいな。なんでそんなこと聞くの？僕と一緒に行きたい？

マイケル： そうなればいいな。いつ行くか計画を立てることになったら教えてよ。絶対行くからさ。